

## 拒食症

1983年1月にアメリカのシンガー・ソング・ライター、カレン・カーペンターが32歳で拒食症(anorexia nervosa)のため急逝した。正確には、病的飢餓による血清中のカリウムの不足のため心不全を起こしたのである。また同じ年に女優のジェイン・フォンダも大学在学中から既に神経性大食症(anorexia bulimia)に苦しんでいたことを告白している。1973年にヒルデ・ブラッチが症例を報告したものの、特に注目を引かなかったこのような摂食障害が、この時マスコミによって大きく取り上げられることとなった。そのため拒食症は一般にはエイズのように現代病の一つと受け取られているが、実は拒食症の症状は意外に古くから知られている。ただし19世紀まではこれが病気とはみなされていなかった。むしろこの一連の症状は巫女が神と交信するときの一種の精神状態として肯定的に捉えられていた。

ルドルフ・ベルの『聖なる拒食』(Holy Anorexia)には中世イタリアの261人の拒食聖女の記録がある。拒食聖女とは月に一度聖体拝受の際に与えられるパンとワインだけで生命を繋いでいる女性のことで、このような苦行は「奇跡の拒食」(anorexia mirabilis)と呼ばれ、教会から称えられた。キリストの受難を我が身に再現したのはほとんどが思春期の女性であった。食を断ち、睡眠を最小限にとどめ、むち打ち苦行や湯焼きといった中世の聖女たちの苦行は様々な神秘的幻想を引き起こした。そうした幻想は教会から神のお告げと認められ、また拒食による身体的症状は聖痕とみなされた。さらに、その遺骨は遺物崇拝の対象であった。

その後宗教改革を経て、カトリック側の「拒食聖女」も新教側では逆に悪魔に憑依された魔女と考えられたりしたが、いずれにしても宗教上の問題であることに変わりはなかった。この神秘的な捉え方は19世紀まで続いた。

これに対して医学的な捉え方も17世紀末から始めている。1694年にジェームズ二世の侍医であるリチャード・モートンが現在拒食症と呼ばれている症例を二例初めて病気として記述した。1873年にはヴィクトリア女王の侍医、ウィリアム・ワイジー・ガル卿が極端な痩身、食欲不振、無月経を主な症状とし、なおかつ病気との自覚がないケースを拒食症と命名した。ヒステリー、神経衰弱、多重人格、広場恐怖症、ホジソン病、パーキンソン病、アディソン病等々多くの病気はこの時代に発見された。消化器官の異常を伴わない食欲不振がこの時期に初めて病気として認識されたのは当然のことであったかも知れない。

1869年頃から「タットベリーの断食をする女性」、「ウェイルズの断食をする少女」、「ブルックリンの奇跡」、「フォート・ブレインの断食をする少女」などと呼ばれる拒食症の女性たちが新聞を賑わすようになる。場所に主眼を置いたこの命名法は中世の拒食聖女の命名法と同じである。この時代は拒食が聖女の証なのか、まやかしの証なのか、はたまた病気なのか、医師の間でもまだ意見がわかれていた。しかし、一般には依然として拒食は教会の言うとおりに聖女の証として考えられ、聖地巡礼を模倣した「拒食聖女巡礼」が流行する。この頃から世紀末にかけて英米仏の中産階級の子女たちの間で拒食症は大流行する。この病気の流行はこの時代の家父長制度によって抑圧され、出口を失った女性の生のエネルギーが自己破壊に向かったものと言えよう。拒食症は女性たちの言葉にならない抗議である。従って一面ではこれは文化の病とも言える。その後、この病気の存在は忘れられ、痩身を理想の女性美と考える現代に至って再び流行をみるのである。

文化の病としての拒食症の扱いは文学上では早くも18世紀の書簡体小説『クラリッサ』(1747-48)にみられる。サミュエル・リチャードソンのこの小説は迫害された処女の物語である。知性と感受性に恵まれた若い女主人公クラリッサは、家名という名の抑圧の下に苦しみ悩んでいたところを、名うての放蕩者ラヴレスの手で言葉巧みに連れ出され、強姦される。そのショックでクラリッサは精神錯乱をきたし、救出後ようやく正気を取り戻すが、家名に執着する父親の命に背いたことで自責の念にかられ、死を願い、望み通りに死を遂げる。直接的な死因は語られていないが、決して物理的な自殺手段を採ったのではないことははっきりしている。「手折られた白百合の花」の殉教者としての、つまり聖女としての死が描かれている。中世の拒食聖女の歴史や弱者の抗議の印がハンガー・ストライキであること等を考え合わせると、クラリッサの死も拒食による衰弱死である。この抑圧と拒食というテーマは迫害される処女を描くゴシック小説を媒介として、19世

紀半ばのブロンテ姉妹へと受け継がれていった。かくして19世紀末の女性と拒食との抜き差しならぬ関係は18世紀の文学の中に先取りされているのである。

1847年出版のエミリー・ブロンテ作、『嵐が丘』はキャサリンとヒースクリフの悲恋物語とされている。しかしこれは、キャサリンが子供から大人になろうとする段階で起きた悲劇として解釈すると、自己喪失によって引き起こされた拒食症の物語としても読むことができる。

キャサリンはヒースクリフと二人で野生児さながらに自由奔放で無垢な少女時代を送っていた。「自分自身よりもっと自分らしい」ヒースクリフはキャサリンの分身である。キャサリンは性の目覚めからお屋敷で文化的な生活をしているエドガーに魅了されて結婚する。文化的な生活に適応するためには教育されて淑女に変身する必要があった。つまり野性的な分身であるヒースクリフを抹殺しなければならなかった。キャサリンは妊娠したが、自己分裂してしまった彼女は子供を産むという身体の分裂に耐えきれず、拒食症となり、産褥の床で死亡する。キャサリンの拒食は自然児キャサリンが女性として成熟することに失敗したことを示す。

この作品にはもう一人拒食症の症状を示す女性が登場する。エドガーの妹イザベラは幼いときより「小さな大人」として育てられてきたが、ヒースクリフとの結婚をきっかけに嵐が丘で拒食症に陥る。動物の死体が転がっている不潔な台所で不作法な人たちと「生(なま)の食べ物」を取ることができないからである。「文化的な」イザベラは「自然な」子供時代を体験していない。自己分裂の危機であることは同じでも、彼女の拒食症はキャサリンとは逆に「子供」になれなかったことを示す。自然児キャサリン同様、文化の申し子イザベラも真の意味で成熟した女性になりきれなかったのである。

ヒースクリフもまた餓死を選ぶ。自分の分身であるキャサリンを文字通り失ったからである。現実の世界はその喪失を思いださせることしかしない。故に幻想の世界で喪失した魂を発見しようとする。その幻想の世界を求めるあまり拒食となるが、失われた魂との再合一は結局果たせなかった。キャサリンはヒースクリフの幻想の中にさえ現れることはなかった。『嵐が丘』で描き出された拒食症は自己分裂の表象である。この作品は相反するものの統一の不可能性を示している。

作家エミリーの姉シャーロットは、1849年に『シャーリー』の中で、拒食症の元凶が家父長制であることを主張している。叔父の下で暮らすキャロラインは従兄ロバートへの報われない愛を抱いたまま、経済的に自立することも許されずに、「家庭の中の天使」として家の中に閉じこめられている。生きる目的を見いだせないキャロラインは拒食症となる。彼女の発病を契機に幼い娘を置き去りにして出奔していた母親が名乗り出て看病を引き受ける。以来キャロラインの鬱積した感情は出口を見だし、彼女は快方に向かう。しかしやはり家父長的なロバートと結婚することになったキャロラインに再発の危険がないとは言えない。その後の経緯は書かれていないが、叔父の妻メアリのケースは彼女の母親のケース同様に暗示的である。メアリは結婚と同時にだんだんと衰弱していき、帰らぬ人となっている。このように結婚は女性を縛りその可能性をもぎ取るものとして提示されている。

女性と拒食症との関係は様々な作品の中で取り上げられている。例えば、不思議な国へ行ったアリスは食べ物を口にする度ごとに変身する。食欲の赴くままに食べ物を取ることの危険を学ぶ必要があったのである。鏡の国ではさらに空腹感を我慢することを学ばなければならなかった。アリス物語は子供から大人になるためには欲望をコントロールする必要があることを示している。拒食症大流行の根底には一つの文化の下での欲望コントロールの喪失がある。

ベスト・セラーとなった1897年の『吸血鬼』もまた摂食障害の物語として読むことができる。ドラキュラ伯爵に血を吸われたルーシー・ウェステンラは極度の貧血を伴った拒食症に陥って死亡する。吸血鬼として蘇ったルーシーの喉は人間の食べ物を通さない。人血のみが食べ物になってしまう。吸血鬼とは妊娠中の女性が罹りやすい異食症(pica)、つまり糞便のような食べられない物を食べたくなる病気に罹患した人間のことであろう。精神医学の権威者ヘルシングがドラキュラ伯爵の好敵手として登場するのは、摂食障害が精神の病、つまり文化の病であることを物語っている。